主観的独身理由によるパートナー獲得タイミングの違い
―イベントヒストリー分析をもちいて―

山口　茜
HS30-0101B

目次

１　はじめに 1
２　先行研究 1
３　仮説 1
４　データと分析方法 2
５　分析結果 2
６　結論 2
７　参考文献 2

1　はじめに

現代日本では非婚化現象が進んでいる．善積（2003）は，法律婚が主流の日本においても，婚姻をする者は減少傾向にあり，未婚化・晩婚化による非婚化現象が進行していることを指摘している．未婚化・晩婚化は多くの独身者にとって一概に「悪い事」でもない．しかしながら，依然として多くの独身者は婚姻を望んでいる．実際，国立社会保障・人口問題研究所（2017）の調査結果では，男女の 8 割 9 割が婚姻を望んでいる．

そこで本稿では，多くの独身者が婚姻を望んでいるにもかかわらず婚姻に至りにくい要因として，なによりも彼ら自身が婚姻に踏み出しにくい要因と考えている「主観的独身理由」に注目し，主観的独身理由ごとに，婚姻に至るまでの期間にどのような影響の違いが生じるのかを明らかにしていく．非婚化の要因を把握することで，独身者の婚姻願望と非婚化現象とのギャップを解消し，理想のパートナーシップを実現するための手がかりを模索する．

2　先行研究

なぜ，独身者の多くは婚姻を望んでいるにも関わらず，早期に婚姻に至りにくい傾向にあるのか．

国立社会保障・人口問題研究所（2017）の調査結果では男女の 7 割が婚姻をするにあたり障害があると回答しており，障害として，結婚資金，住居や仕事関係，親の影響，年齢，健康上の理由が挙げられている．

また，とくに男性個々人の社会的地位が，婚姻の生起に大きく関わっている可能性がある．山田（2019）は低学歴・低収入の男性は壮年独身者になりやすいことを指摘しており，その原因として女性の低い平均収入や非正規雇用者の多さを示唆している．中込ほか（2021）も，婚姻の意義は「経済的自立」と「心理的な満足」であると指摘したのちに，先行きが見えない現代社会における未婚化の進行は当然であると述べている．

3　仮説

本稿の仮説は大きく分けて 3 つある．第 1 の仮説は「主観的独身理由が，パートナーと出会う機会不足である場合，婚姻タイミングは早くなりやすい」である．機会さえあれば，早期に婚姻に結びつく可能性があるためである．第 2 の仮説は「主観的独身理由が，必要を感じないためである場合，婚姻タイミングは遅くなりやすい」である．ここでは，仮説 2-1 として「とくに，比較的安定性を感じやすい正規雇用者や健康者は婚姻タイミングは遅くなりやすい」と立てた．仮説 3 は「主観的独身理由が，婚姻生活への不安である場合，婚姻タイミングは遅くなりやすい」である．ここでは，仮説 3-1 として「とくに，社会的地位の低い非正規雇用者や

低収入，低学歴であると婚姻タイミングは遅くなりやすい」と立てた．

4　データと分析方法

データは,「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」（JLPS）に含まれる，若年パネル調査と壮年パネル調査のうち，主観的独身理由が尋ねられていない wave2 と wave4 を除いた wave1 から wave10 の合計 8 つの調査を用いる．従属変数は，婚姻の生起を用いる．独立変数は，主観的独身理由のほか，性別，現職・働き方，主観的健康，個人収入，学歴を用いる．統制変数は，生年と交際相手の有無を加える．分析方法は，イベントヒストリー分析をおこなう．予備分析のあと，第一に，主観的独身理由全体のイベントヒストリー分析をおこなう．

第二に，主観的独身理由である「機会不足群」「結婚不要群」「経済-生活不安群」の 3 つを独立変数として投入したイベントヒストリー分析をおこなう．最後に，さらに細かく仮説 2-1 と 3-1 について検証するために交互作用効果をみる．

5　分析結果

3 つの主観的独身理由の中で最も婚姻が遅れやすかったのは，「結婚不要群」であった．交互作用効果をみると，無職と非正規雇用者の婚姻タイミングが比較的早かった．また，最も婚姻が早まりやすいのは「経済-生活不安群」であった．

6　結論

本稿の分析結果から，婚姻不要と感じているために独身状態でいる者は，とくに，婚姻タイミングが遅れやすいことが明らかになった．分析結果で注目すべき点は結婚不要群の独特な分析結果である．他の分析では早期に婚姻に結びつきやすいのは正規雇用者・自営であったにもかかわらず，結婚不要群においては，早期に婚姻に結びつきやすいのは無職・非正規雇用者であった．本稿は，その理由として主観的独身理由という設問の特性上，回答の際に体面を保つための言い訳や軽いウソ，バイアスがかかった回答をしている可能性を考えた．つまり，結婚不要群における無職と非正規雇用者は本当は婚姻を望んでいる可能性が示唆された．また，主観的独身理由（すべて）を独立変数とした第一の分析では，今現在打ち込みたいことがある者などは婚姻が遅れやすいことがわかった．やはり，婚姻を望んでいることは婚姻タイミングを早め，婚姻への積極的姿勢の欠如こそが，非婚化を押し進める要因であるといえる．

しかし，分析結果からは改めて，望んで独身状態でいる人々の存在を再確認できたともいえる．やはり，非婚化は必ずしも「悪い事」ではない．したがって，個々人が望むパートナーのあり方が実現できるように，意識からでも変えていこうとする試みも，これからの日本の考えるべき選択肢として存在するといえる．

本稿の課題は 3 つある．第一に，サンプルサイズの問題で男女別に分析ができなかった．第二に，個人収入をあえて 5 つに分類したものの，目に見えた意義はかんじなかった．最後に，使用データの設問の制約上，親同居や子どもの有無，その他人間関係に焦点を当てた，社会関係資本についての分析ができなかった．

7　参考文献

国立社会保障・人口問題研究所，2017，『現代日本の結婚と出産――第 15 回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書』．

山田昌弘，2019，「独身者の生活実態」『家族社会学研究』31(2) 150-159.

中込睦子・中野紀和・中野泰，2021，『現代家族のリアル――モデルなき時代の選択肢』ミネルヴァ書房.

善積京子，2003，「<近代結婚>の揺らぎ――スウェーデン社会からみた結婚の意義」『家族社会学研究』14(2) 43-53.